

# 英語スピーキングに対する不安尺度作成

－小学校英語の教科化に向けて－

## Developing and Validating the English Speaking Anxiety Scale: A Research for English as a Subject of Elementary Schools in Japan

熊田 岐子・岡村 季光

Michiko Kumada, Toshimitsu Okamura

### 要旨

本稿では、小学校の「外国語活動」・「外国語」が平成30年度から移行期間に入ることを踏まえ、小学校教職課程生を対象とした英語スピーキング不安の尺度作成を行った。教職課程生の英語力でも特に必要とされているのがスピーキング力だと考えられるからである。Horwitz et al. (1986) のFLCAS (the Foreign Language Classroom Anxiety Scale) からスピーキング不安に関係する項目を抜粋し、情動的反応などの日本人の特性を踏まえた項目を筆者らが付け加えた。本尺度の特色としては、現在の英語学習者としての英語スピーキング不安と将来小学校教員になったことを想定した英語スピーキング不安を測る項目を並行させたことにある。結果として、現在のスピーキング不安では13項目が、将来の小学校教員としてのスピーキング不安では15項目が、信頼性と妥当性を得た尺度として残された。また、英語スピーキング不安尺度の妥当性を検討する段階において、英語学習者が英語スピーキング時の「情動的反応性」を克服し、英語スピーキングに対する「自信」をつける英語授業の必要性が示唆された。

キーワード： 外国語活動・外国語、現在と将来の英語スピーキング不安、対人不安傾向

### 1. はじめに

現在、小学校の「外国語活動」は5・6年生対象とされ、学習指導要領の目標に沿った様々な取り組みが各教育委員会・各学校で行われている。そして、更なる外国語教育の強化を目指して、3・4年生に「外国語活動」が、5・6年生に「外国語」が平成30年度から移行期間に入り、平成32年度から全面実施されることとなった。平成29年6月に示された小学校学習指導要領解説（文部科学省，2017a; 2017b）には、小学校中学年への外国語活動導入・高学年の教科化に関して、グローバル化に対応する必要性が生じたこと、および、現行学習指導要領実施の課題点として「①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められること（pp.5-6）」が明示された。このような次期学習指導要領の開始に伴って、英語を教科として指導できる小学校教員養成が急務となっているのが現状である。

そこで、本研究は、小学校英語が教科になることを踏まえて、将来英語授業を行う教職課程生に適した大学の英語授業（英会話授業、指導法授業を想定）とは何かを検討することを目的とする。特に、英語授業でその使用が

強く求められている英語スピーキングを研究対象とする。本研究の一環として、本稿では、教職課程生がどのような英語スピーキングに対する感情・不安を抱えているのかを検証するための尺度を検討する。

## 2. 研究背景

### 2.1 小学校英語に関する実態調査報告

ベネッセ教育総合研究所における「第2回 小学校英語に関する基本調査（教員調査）（2011年）」では、英語活動の実施状況等が調査されている。小学校教員が抱く英語活動指導への自信に関しては、「あまり自信がない」という回答が56.1%と半分以上を占めている（p.50）。本調査からの結果からは、各教育委員会等で英語指導研修が多く行われているものの、英語指導に対する不安を持っている小学校教員は少なくないと言えよう。松宮新吾（2013）では、外国語活動の担当者が抱く「授業不安」（“teaching anxiety”）について検証している。抽出された「英語指導力不安」には「英語を聞いたり話したりすることに対する不安」等が影響していることが明らかにされた。また、小学校教員が抱く大きな不安要因は、「担当者の英語力や英語運用能力に対する不安そのものである（p. 336）」と指摘されている。

また、教職課程生を対象とした小学校英語にまつわる感情・不安調査（e.g., 福和・中津, 2014; 名畑目, 2016）、大学の教職課程科目に関する感情・不安調査や科目での試みに関する検討（e.g., 松宮, 2010b, 2013; 物井, 2011）も行われている。本稿で着目する調査結果・考察は、名畑目（2016）や松宮奈賀子（2013）において、教職課程生の英語力でも特に必要とされている（もしくは必要だと感じられている）のは、スピーキング能力であると指摘されている点である。小学校英語において、高学年では「読む」・「書く」も目標に組み込まれているが、中学年・高学年双方の目標に「聞く」・「話す」が入っている。つまり、「聞く」・「話す」は次期学習指導要領においても重要だとみなせる事項であり、英語指導者にとって、どうしても必要な英語運用力である。そこで、本研究では、英語指導者も一人の英語学習者である点を踏まえて、英語スピーキングに関する感情・不安を詳細に検討する。次項では、尺度作成という本稿の目的に沿って、学習不安尺度についての先行研究に焦点を絞っていく。

### 2.2 外国語学習不安尺度

外国語学習不安の検証に大きな貢献をしたのは、Horwitz et al. (1986) による the Foreign Language Classroom Anxiety Scale（以下、FLCAS）である。FLCASは、「コミュニケーション不安」（“communication apprehension”）、「否定的評価への恐れ」（“fear of negative evaluation”）、「テスト不安」（“test anxiety”）から成り立っている。しかし、その後の研究（MacIntyre & Gardner, 1989）において、「テスト不安」は外国語不安に限った要因ではないとされ、Aida (1994) では、「テスト不安」は外国語不安要素として認められなかった。近年では、近藤・楊（2003）による日本人英語学習者用のELCAS（English Language Classroom Anxiety Scale）が検討され、松宮（2010a）では、ELCASを応用して、小学校英語不安に関する調査を児童対象に行った。本調査の締めくくりとして、不安を取り除くのではなく、不安を表す児童に対してどのように対処すべきかが大切であると主張されている。

### 2.3 外国語スピーキング不安

外国語学習不安における先行研究は、FLCASを使用するなどして多くみられるが、Young (1990: 541) では、外国語スピーキング不安に関する研究は比較少ないと指摘される。しかしながら、Young (1991: 539) は、スピーキングが外国語学習において学習者の不安を最も生む要因であると指摘する。近年は EFL 環境や ESL 環境などの

国々で研究が進められており、Woodrow (2009) は、英語学習者用アカデミックコースを持つオーストラリアの大学の英語学習者を対象として、スピーキング不安とパフォーマンスの関係等を調査した。結果として、スピーキング不安がパフォーマンスに影響することが見出されている。Öztürk and Gürbüz (2014) は、トルコの EFL 環境での英語スピーキング不安について検討している。調査協力者のほとんどが、不安を生む要因として自らのスピーキングスキルを挙げている。さらに、発音・質問・間違えへの恐れ・否定的な評価がスピーキング不安の要因となっていることが明らかになった。ギリシャにおいては、Tsiplakides and Keramida (2009) によって、仲間からの否定的評価の恐れやスピーキングスキルの低さへの認知を軽減する指導法の示唆がなされている。いわば、“the fear of speaking in a foreign language may be related to a variety of complex psychological constructs such as communication apprehension, self-esteem, and social anxiety. (Young, 1990: 540)” とあるように、外国語スピーキングの学習者心的要因は多層的だと考えられる。ここで言われている「コミュニケーション不安」(“communication apprehension”) とは、他者とのコミュニケーションに対する恐れ・不安を指すとされる。「自尊心」(“self-esteem”) が低いほど、パフォーマンスに悪影響を与えるという。つまり、スピーキングスキルに対する自信に関係すると考えられる。また、「社会的不安」(“social anxiety”) とは、現実の、もしくは想像の場面における個人間の評価・評価可能性への不安だと定義される。いわば、スピーキングに対する他者からの否定的評価に対する不安を指すであろう。

### 3. 尺度作成

#### 3. 1 項目内容

##### 3. 1. 1 英語スピーキング不安尺度

本研究では、英語スピーキング不安尺度作成において、2つの場面を想定した。すなわち、現在英語学習者として感じる不安、将来小学校教員になった際に感じる不安である。まず第1に、現在英語学習者として感じる英語スピーキング不安尺度（以下、現在の英語スピーキング不安尺度）を作成するにあたり、Öztürk and Gürbüz (2014) を参考にしながら、FLCAS のスピーキングに関係する項目を15項目抜粋（必要に応じて改編）した（項目番号1～15）。さらに、他の人から見られることから生じる情動的反応や不安感などの日本人の特性を考慮した6項目を筆者らが独自に作成した（項目番号16～21）。FLCAS の日本語訳は、Yashima et al. (2009) を採用したが、調査協力者にわかりやすいように変更を加えた箇所もある。第2に、将来小学校教員になったことを想定した英語スピーキング不安尺度（以下、将来の英語スピーキング不安尺度）について、上述の項目を文脈に応じて適宜改変し作成した。後者における尺度項目は、小学校における英語の教科化を踏まえて付帯させたものである。選択肢はいずれも「5：そう思う 4：まあそう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない」の5件法であった。

##### 3. 1. 2 尺度妥当性検討

英語スピーキング不安尺度の併存的妥当性を検討するために、以下の尺度との関連を検討した。

第1に、自意識尺度日本語版（菅原, 1984）である。本研究では下位尺度である「公的自意識」11項目を用いた。選択肢は「6：非常にあてはまる 5：あてはまる 4：ややあてはまる 3：ややあてはまらない 2：あてはまらない 1：全くあてはまらない」の6件法であった。

第2に、対人不安傾向尺度（松尾・新井, 1998）である。下位尺度として「否定的評価懸念」7項目、「情動的反

応性」6項目、「対人関与の苦痛」5項目、合計21項目で構成されていた。選択肢は「4：とてもあてはまる 3：すこしあてはまる 2：あてはまらない 1：ぜんぜんあてはまらない」の4件法であった。

第3に、自尊感情尺度（山本・松井・山成, 1982）である。1因子構成の10項目で構成されていた。選択肢は「5：あてはまる 4：ややあてはまる 3：どちらともいえない 2：ややあてはまらない 1：あてはまらない」の5件法であった。

### 3. 2 方法

#### 3. 2. 1 調査協力者

調査協力者は、小学校教職課程に所属し、かつ、将来、小学校教員が英語科を教授することを想定した課外授業「小学校英語指導者プログラム」を受講した大学2年生から4年生の78名（男47、女30、性別不明1）であった。

#### 3. 2. 2 調査手続き

3. 2. 1で示した調査協力者を対象に、「小学校英語指導者プログラム」の初回に、3. 1で示した尺度が印刷された質問用紙を配付し、一斉実施及び回収を行った。

なお、調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないこと、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になることは決してないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、実施した。

### 3. 3 分析と結果

#### 3. 3. 1 英語スピーキング不安尺度における信頼性の検討

現在の英語スピーキング不安尺度21項目、将来の英語スピーキング不安尺度21項目について、それぞれ平均値及び標準偏差（SD）を算出し、平均値±SDが5を上回る、または1を下回る項目を除いた後に主成分分析を実施した。その結果、各尺度とも1次元性の確認を行った。第1主成分に対する負荷量が|.40|以上を基準とし、基準値に満たさない項目を除いた結果、前者は表1、後者は表2のような結果が得られた。信頼性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した結果、前者は $\alpha=.91$ 、後者は $\alpha=.89$ となり、それぞれ高い内的整合性が確認できた。

#### 3. 3. 2 英語スピーキング不安尺度における妥当性の検討

各英語スピーキング不安尺度の併存的妥当性を検討するため、各英語スピーキング不安尺度、自意識尺度日本語版の「公的自意識」、対人不安傾向尺度の「否定的評価懸念」、「情動的反応性」、「対人関与の苦痛」、自尊感情尺度との関係において、ピアソンの相関係数を算出した。結果を表3に示す。現在と将来の英語スピーキング不安が高い正の相関がみられ、各英語スピーキング不安と「否定的評価懸念」、「情動的反応性」及び「対人関与の苦痛」に中程度の正の相関がみられた。また、「自尊感情」とは中程度の負の相関がみられた。上述の結果は先行研究の知見とも一致することから、併存的妥当性を示していると言えよう。一方、「公的自意識」とは有意な相関がみられなかった。松尾・新井（1998）は、公的自己意識と対人的自己効力感との間には関連がみられないとしている。本尺度が英語スピーキングに対する自信のなさ、すなわち自己効力感のなさを測定していると捉えれば、両者に関連がみられないことは首肯できるであろう。

表1 現在の英語スピーキング不安尺度の主成分分析結果 (N=78)

項	目	負荷量	共通性	平均	SD
15	先生が、前もって準備していなかった質問をすると緊張する。	.809	.655	3.51	1.13
5	英語の授業で自分からすすんで答えるのは恥ずかしい。	.794	.630	3.56	1.16
19	英語で話しかけられると、どきどきする。	.776	.603	3.46	1.17
8	英語の授業の予習を十分にしているにもかかわらず心配になる。	.739	.545	3.18	1.27
14	常に他の学生の方が英語で話すのが上手だと感じている。	.693	.480	3.53	1.19
13	英語の授業で話すとき緊張したり混乱したりする。	.692	.479	3.56	1.16
12	私が英語を話すと他の学生が笑うのではないかと思う。	.687	.472	2.88	1.21
21	英語を話すとき、いつもだれかが、自分の事を見ているようで心配だ。	.682	.466	2.31	1.26
7	英語の授業では、緊張のあまり、知っていたことも忘れてしまうときがある。	.675	.456	3.17	1.30
18	英語で話すのを失敗したらどうなるかと不安である。	.662	.438	3.22	1.20
3	英語の授業で間違えることは気にならない。	-.635	.404	2.69	1.25
16	英語で話すとき、緊張で顔が赤くならないか心配だ。	.627	.393	2.67	1.35
10	英語を母語とする話者と英語で話しても緊張しない。	-.488	.238	2.27	1.24
		因子寄与	6.257		
(以下、基準に満たさなかった項目)				平均	SD
1	英語の授業で先生の言っていることが理解できないととても不安だ。			4.00	1.03
2	英語の授業で話すとき自信がもてない。			4.35	.89
4	英語の授業で準備なしに話さないといけないとき、パニックになる。			3.87	1.17
6	先生が自分の間違いをいちいち直しそうなので心配だ。			2.94	1.18
9	他の学生の前で英語を話すとき自意識がとて高くなる。			2.47	1.15
11	英語の授業で話すのに自信がある。			1.53	.78
17	英語を話すのが得意である。			1.56	.88
20	英語で話しかけられても、うまくやれる自信がある。			1.90	.95

#### 4. 考察

本稿では、英語スピーキング不安の尺度作成を研究課題としていた。現在のスピーキング不安では13項目が、将来の小学校教員としてのスピーキング不安では15項目が、信頼性と妥当性を得た尺度として残された。英語スピーキング不安の尺度作成にあたり、ここでは表3の以下3点に着目する。

第1に、英語スピーキング不安と「否定的評価懸念」「情動的反応性」「対人関与の苦痛」間に相関が見られた。特にここで注目したいのは、「情動的反応性」が、現在の不安と将来の不安に対し、中程度の正の相関を示した点である（現在の不安との相関：.547、将来の不安との相関：.520）。「ドキドキする」や「顔が赤くなる」等の「情動的反応性」は、パフォーマンスの際に影響を与えることが考えられる。つまり、スピーキング不安が、パフォーマンスに影響する（Woodrow, 2006）可能性が示唆された。また、「情動的反応性」は、一般的に日本人の特性ともとらえられる。したがって、「情動的反応性」を克服する英語授業が求められるということになる。

第2に、現在の不安と将来の不安に対して、「自尊感情」が負の相関を提示した点について考えたい（現在の不

表2 将来の英語スピーキング不安尺度の主成分分析結果 (N=78)

項	目	負荷量	共通性	平均	SD
18	英語で話すのを失敗したらどうなるかと不安である。	.821	.675	3.36	1.16
15	児童が、前もって準備していなかった質問をすると緊張する。	.813	.662	3.71	1.08
4	英語の授業で準備なしに話さないといけないとき、パニックになる。	.731	.534	3.81	1.07
13	英語の授業で話すとき、緊張したり混乱したりする。	.707	.500	3.19	1.20
19	児童に英語で話しかけられると、どきどきする。	.705	.498	3.35	1.18
12	私が英語を話すとき児童が笑うのではないかと思う。	.698	.487	2.56	1.16
8	英語の授業の準備を十分にしているにもかかわらず心配になる。	.643	.414	3.72	1.08
7	英語の授業では、緊張のあまり、知っていたことも忘れてしまうときがある。	.635	.403	3.44	1.09
5	英語の授業で、自分からすすんで話すのは恥ずかしい。	.589	.347	2.92	1.21
3	英語の授業で間違えることは気にならない。	-.579	.335	2.36	1.29
21	英語を話すとき、いつもだれかが、自分の事を見ているようで心配だ。	.575	.331	2.46	1.14
20	児童に英語で話しかけられても、うまくやれる自信がある。	-.555	.308	2.35	1.11
14	常に他の先生の方が英語で話すのが上手だと感じている。	.500	.250	3.78	1.11
6	他の先生が自分の間違いをいちいち直そうなので心配だ。	.495	.245	3.05	1.12
16	英語を話すとき、緊張で顔が赤くならないか心配だ。	.472	.223	2.58	1.22
		因子寄与	6.210		
(以下、基準に満たさなかった項目)				平均	SD
1	英語の授業で、ALTの先生の言っていることが理解できないととても不安だ。			4.04	1.14
2	英語の授業で話すとき自信がもてない。			3.77	1.24
9	児童の前で英語を話すとき自意識がとても高くなる。			2.69	1.12
10	英語を母語とする児童と英語で話しても緊張しない。			2.46	1.30
11	英語の授業で話すのに自信がある。			1.88	1.05
17	英語を話すのが得意である。			1.77	1.03

表3 英語スピーキング不安尺度と諸変数の関係 (r)

	現在の不安	将来の不安	公的自意識	否定的評価懸念	情動的反応性	対人関与の苦痛	自尊感情
現在の不安							
将来の不安	.698***						
公的自意識	.215	.145					
否定的評価懸念	.366**	.350**	.714***				
情動的反応性	.547***	.520***	.509***	.704***			
対人関与の苦痛	.318**	.247*	.130	.407***	.583***		
自尊感情	-.392***	-.412***	-.250*	-.409***	-.481***	-.457***	

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

安との相関：-.392、将来の不安との相関：-.412)。調査協力者の特性もあろうが、本稿では、英語スピーキングに対する自信のなさが「自尊感情」の低さに通じることが明示された。一般化するのは難しいが、「自尊感情」を傷つけずに、英語スピーキングに自信をつける英語授業が必要だという解釈になる。つまり、英語を通して、自分に自信をつける授業を目標とするということになる。苦手だと感じる英語スピーキングができるという実感を持たせることにより、自分に自信をつけることが推測される。

第3に、英語スピーキング不安と「公的自意識」間に有意な相関が見られなかった。人から見られるという「公的自意識」は、英語スピーキングが介入することによって、敏感になるのかもしれない。英語スピーキングに対する不得意意識等が関係しているとも考えられる。もしくは、「公的自意識」が、他の「否定的評価懸念」「情動的反応性」に関与していると取ることもできる。

## 5. おわりに

小学校英語の教科化を踏まえて、英語スピーキング不安尺度を作成し、その詳細を検討してきた。その過程において、英語スピーキング時の「情動的反応性」を克服し、英語スピーキングに対する「自信」をつける英語授業の必要性が示唆された。自信をつけるためには、英語スピーキング経験が積める授業が必要になるであろう。しかしながら、スピーキング不安を軽減させるための「経験を積む」英語授業が、かえって不安の積み重ねからさらなる不安を呼び起こすことも考えられる。不安を軽減しながらも、不安に対して、学習者自身・教員側が対処できる授業が理想である (cf., 松宮2010a)。今後は、本研究を精緻化するために、母語の状態での不安要素が英語スピーキング不安に及ぼす影響、および現在の英語スピーキング不安が将来の英語スピーキング不安とどのように関係するのかを検討したい。

## 引用・参考文献

- Aida, Y. (1994). Examination of Horwitz, Horwitz and Cope's construct of foreign language anxiety: The case of students of Japanese. *The Modern Language Journal*, 78(2), 155-168.
- Horwitz, E. K. (1986). Preliminary evidence for the reliability and validity of a foreign language anxiety scale. *TESOL Quarterly*, 20(3), 559-562.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70, 125-132.
- Kondo, D. S., & Ying-Ling, Y. (2004). Strategies for coping with language anxiety: The case of students of English in Japan. *ELT Journal*, 58(3), 258-265.
- MacIntyre, P. D., Clement, R., Dornyei, Z., & Noels, K. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*, 82(4), 545-562.
- MacIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1989). Anxiety and second-language learning: Toward a theoretical clarification. *Language Learning*, 39(2), 251-275.
- Öztürk, G., & Gürbüz, N. (2014). Speaking anxiety among Turkish EFL learners: The case at a state university. *Journal of Language and Linguistic Studies*, 10(1), 1-17.
- Tsiplakides, I., & Keramida, A. (2009). Helping students overcome foreign language speaking anxiety in the English classroom: Theoretical issues and practical recommendations. *International Education Studies*, 2(4), 39-

44.

Woodrow, L. (2006). Anxiety and speaking English as a second language. *RELC Journal*, 37(3), 308-328.

Yashima, T., Noels, K., Shizuka, T., Takeuchi, O., Yamane, S. & Yoshizawa, K. (2009). The interplay of classroom anxiety, intrinsic motivation, and gender in the Japanese EFL context. *Journal of Foreign Language Education and Research*, 17, 41-64.

Young, D. J. (1990). An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23(6), 539-553.

Young, D. J. (1991). Creating a low-anxiety classroom environment: What does language anxiety research suggest? *The Modern Language Journal*, 75(4), 426-437.

磯田貴道 (2007). 「英語スピーキング抵抗感尺度の作成」. 『広島外国語教育研究』, 11, 41-49.

近藤真治・楊瑛玲 (2003). 「大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討」. *JALT Journal*, 25(2), 187.

菅原健介 (1984). 「自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み」. 『心理学研究』, 55(3), 184-188.

名畑目真吾 (2016). 「小学校外国語活動の指導に対する教育学部生の意識－意識構造と個人差を焦点に－」. 『共栄大学研究論集』, 14, 217-232.

福和寛晴・中津植男 (2014). 「小学校教員を志望する大学生の小学校外国語活動に対する不安度の調査」. 『愛知教育大学紀要』, 63, 203-210.

ベネッセ教育総合研究所 (2011) 『第2回 小学校英語に関する基本調査(教員調査)』. (<http://berd.benesse.jp/global/research/detail.php?id=3179>) 2017年7月15日確認.

松尾直博・新井邦二郎 (1998). 「児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係」. 『教育心理学研究』, 46(1), 21-30.

松宮新吾 (2013). 「小学校外国語活動担当教員の授業指導不安にかかわる研究(授業指導不安モデルの探求と検証)」. 『関西外国語大学研究論集』, 97, 134-149.

松宮奈賀子 (2010a). 「小学校外国語活動における児童の不安に関する実態調査」. 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第一部, 学習開発関連領域, 59, 107-114.

松宮奈賀子 (2010b). 「小学校教員を目指す学生の『外国語(英語)活動に関する演習科目』履修がもたらす学生の変容(特集 英語教育)」. 『クオリティ・エデュケーション』, 3, 111-134.

松宮奈賀子 (2013). 「外国語活動の指導に求められる英語運用力向上のための試み－英語スピーチ練習の可能性－」. 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第一部, 学習開発関連領域, 62, 81-88.

物井尚子 (2011). 「『外国語活動』授業力を備えた教員養成のためのシラバスに関する一考察」. 『千葉大学教育学部研究紀要』, 59, 21-27.

文部科学省 (2017a). 『小学校学習指導要領解説 外国語編』. ([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017\\_11\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017_11_1.pdf)) 2017年6月29日確認

文部科学省 (2017b). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』. ([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017\\_13\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017_13_1.pdf)) 2017年7月13日確認

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 「認知された自己の諸側面」. 『教育心理学研究』, 30, 64-68.